「対話と実行」座談会　高校との座談会
第４回「高知南高等学校」（H21.12.18）の概要

１　開会

司会：　ただ今より、高知県知事と高知南高等学校の生徒による「対話と実行」座談会を開催いたします。本日、司会を務めさせていただきます高知南高校生徒会長、副会長です。よろしくお願いします。

校長：　今日は、高校２年生が１年間総合学習の中で「高知を活性化するには」と子供たちの視点から考えた高知の課題や提案したいことなどをお伝えさせていただいて、その後の座談会の材料にしていただきたいと思っています。

　それから生徒の皆さん、今日は皆さん方が思っていることを直接知事さんにぶつけるチャンスです。いろいろな違った観点でのヒントももらえると思いますので、皆さん方がこれまで研究したことを更に深めて、高校を卒業してからも考えていってもらえたら、高知がますます元気になってくるのではないかと思います。今日は、そういう気持ちで発表していただきたいと思います。

２．知事あいさつ

　南高校の皆さん、座談会に応募をしてくださいまして本当にありがとうございました。マネジメント学習で皆さんが勉強して、いろいろ考えられた成果についてのプレゼンテーションを本当に楽しみにしています。

　まず、今、高知県全体としてどのような課題を抱えていて、どのように対応しようとしているのかについてお話します。

　高知県にはいろいろな課題があります。経済、教育、社会福祉の問題もあります。例えば、一人当たりの名目ＧＤＰは国全体としてものを新たにつくり出した量を表すもので高知県は全国第 46 位、工業品出荷も全国 47 位で、多くの経済の指標で高知県は全国でも最下位クラスです。

　高知県の経済は昔から厳しかったですが、特に平成 12 年くらいから状況が変わってきました。それまで全国と高知県を比べたとき、全国がいいときは高知県も良くなって、悪いときは高知県も悪くなるということをずっと繰り返していました。しかし、全国は平成 12 年から 19 年までずっと景気が良く、経済が成長しましたが、この時期に高知県はほとんど良くなることなく低迷し続けました。いろいろな原因はありますが一言で言うと、人口が減り、高齢化が進み始めた。生まれてくる赤ちゃんの数より亡くなる方の数が多いからこういうことになっています。人の数が減るので、物を作る量も当然減り、経済の規模は段々小さくなってきました。例えば、小学校に一人入ればランドセルを一個買いますが、小学生が減るとランドセルの売り上げも落ちるという形で、経済は小さくなってきました。若い人が減ったのと高齢化が進んだダブルのショックで、高知県の経済はどんどん縮んでいる状況です。

　昔と比べてどのくらい若い人が減ったのか。私は高知市立鴨田小学校の出身で、4 年生の

ときに学校が二つに分かれました。分かれてもなお、鴨田小学校の児童数は 2,000 人で、当時高知県で一番大きい小学校でした。今も一番大きいですが、960 人しかいません。そういう形で人口が減り、高齢化が進んでいきました。日本国全体がいずれこういう状況になってきます。皆さんが大人になっていく時代は、人口減少・高齢化が進んでいくと言えると思います。そういう厳しい状況に、高知県が最初に突入しています。「こういう県をどうやって元気にしていくのか」については答えがないです。この状況から抜け出して、人々の暮らしを元気にしていく、若い人たちも県内に残るようにしていくためには、自らが自らの力で、必死になって知恵を絞り出して、一生懸命汗をかいて高知県を元気にすることを考えていかなければなりません。

高知県の経済をもっと元気にしたいと作り上げたのが産業振興計画です。今年の４月から、「本気で実行」と取り組みを進めています。県内市場が小さくなっているのだから、外からお金を稼いでくることや観光客を呼んできて県内でお金を使っていただくことを考えなければなりません。地産外商と言っていますが、高知県で産したものを外で商って、お金を稼いでくる取り組みが必要だと思います。

これから、「高知県はどうせ田舎やき、まあ適当に程々に」という発想ではじり貧です。高知県のようなところだからこそ、全国に出ていってお金も稼いでくる、人も呼んでくることをしなければ生き残れません。

外に打って出ていこうとしたときに、高知県はものすごく恵まれているのではないかと思います。例えば、来年は大河ドラマが「龍馬伝」で、１年間、岩崎弥太郎と坂本龍馬の二人が主役となります。これも絶好のチャンスですが、「高知県の歴史上の人物と言えば、坂本龍馬」と全国で多くの人が分かるでしょう。こういう県は珍しいです。それを持っている私たちは、歴史で全国に情報発信できる、史跡を見たいと来てくれる観光客を獲得することもできるのではないかと思っています。

そしてもう一つ、高知県は食べ物がおいしいところです。旅行会社が、「あなたが行った観光地の中で、地元ならではのおいしい食べ物が多かった県はどこですか」というアンケート調査を取って、2007 年は高知県が全国第１位、2008 年は１位が香川県で２位が高知県、2009 年は１位が沖縄県で２位が高知県です。高知県は今の段階では全国的にそれほど有名ではないですが、行ってみたら楽しくて、食べ物はおいしくて良かったと多くの方に評価を受けているのではないでしょうか。もともと素材が良くて、いい魚が捕れる、いい野菜が取れる、そして、いい食文化があって、上手に調理することができる。更にその食べる雰囲気が楽しい。高知県の宴会ぐらい盛り上がって楽しい宴会はないです。そういうものも全国の人に PR することのできる強みだと思います。

また、高知県には、すばらしいアイデアを持った人材がたくさんいます。よさこい祭りは昔からあったものではなく、戦後、商工会議所の皆さんが高知を元気にしようと考えだしたお祭りです。このお祭りは、今、全国２２０ヵ所で踊られています。全国で通用するお祭りではないでしょうか。高知県は、全国に誇る強みをたくさん持っています。その強みを全国の人にもっと知ってもらい、実際にスーパーで高知県のものを手に取ってもらって、観光客として高知県に来てもらわないといけない。高知県を単に PR するだけでなく、商売などにつ

いても作戦を立てて、大きなデパートとの取引などをどんどん進めないといけない。観光客もこの「龍馬伝」の機会に来てくれるように取り組みを進めています。

産業振興計画の取り組みはまだ始まったばかりですが、幸いにしていろいろな形で少しずつ、歩みは前に進んできたと思います。例えば、県外にものを売り込む機会、商談会とか高知県産品フェアは、今年は昨年の 3.4 倍くらいできます。阪急阪神グループは、野球場、電車、ホテル関連のお店でも、来年１月から３月くらいにかけて高知県を丸ごと売り出してくれるようになりました。でも、実際に計画を立てて実行すると、やはりうまくいかないところもあり、新しく課題が見えてきます。批判を受けることや、提言をしていただけることもあります。そのような批判や提言を入れて、この計画を来年３月までに見直すつもりです。そして、もう一回アクションをしていく。ＰＤＣＡサイクルと言いますが、これをずっと続けていこうと考えています。今年は実行元年ということで、実行し始めたところですから、来年に向けてそれぞれもっとバージョンアップするために見直しをしたいと考えています。

本日皆さんからプレゼンテーションをいただいたら、その見直しに向けた新しい良い知恵をいただけるかもしれません。皆さんのプレゼンテーションを本当に楽しみにしています。本日はどうぞよろしくお願いします。

３　プレゼンテーション（生徒発表）

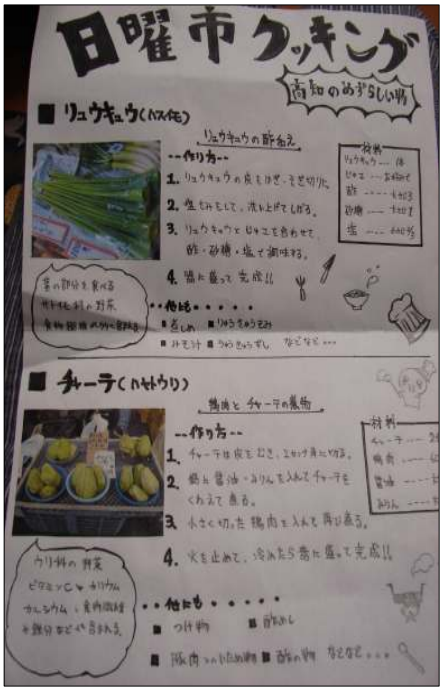
●「高知城のお膝元　日曜市」

私たちは高知の活性化をするため、「高知城のお膝元日曜市」について発表します。なぜ日曜市をテーマにしたかと言うと、高知が全国に誇れるものの一つで、高知県民の人情あふれる場所であり、最近は県内外からも来てくださる方が多く、高知の活性化を行っていくには最適な場所だと考えたからです。

まず、日曜市に訪れていた 100 人にアンケートを実施しました。「本日はどこの県からお越しになりましたか」という質問では、高知県の 40%を上回り、多かったのは県外の 60%でした。県外層の中でも関東地方からの観光客が多く、北海道、青森など東北地方の方もいらしていたことが分かりました。次に、「日曜市にあったらいいと思うものは何ですか」という質問をしたところ、半数を占めていたのが休憩所、ゴミ箱に関する要望です。私たちが調べた中で、休憩所は１カ所しか見られませんでした。続いて、荷物の一時預かり所、何らかのイベントでした。そして、「日曜市に対する意見」を聞いたところ、生産者の顔が見えるので安心などの意見がありました。次に、私たちは高知市内の小学生 60 人にアンケートを行いました。小学生では、たくさんお店が出ていて楽しい、人が多くて前に進めないといった意見がありました。

その後、高知市役所に提案をしてきました。まず休憩所については、「分かりにくい」や「入りにくい」等の意見があり、現状の改善策として気軽に休めるカフェテラスのような休憩所への改装、ベンチの設置を提案しました。それに対し、「増設及び改善は人件面での問題があり難しい」と回答をいただきました。場所を分かりやすく表示して欲しいという提案については、「旗を立てるなど、県内外のお客様に分かりやすいよう検討する」という回答をいただきました。トイレについては、アンケート結果で「たった一つの日曜市のトイレが汚く残念だった」という意見が多数あり、清掃の徹底、またはトイレの増設を提案しました。そ

れに対し、「清掃の回数を増やしても建物自体の老朽化が進んでいて、なかなかきれいにならない。増設は財政難で予算確保が難しい」という回答をいただきました。続いて、子供向けイベントの開催を提案したところ、現在は日曜市のみで使用できるお買物券を幼稚園、保育園へ配布しており、また季節ごとのイベントを提案したところ、「ゴールデンウィークといった祝祭日のイベントは観光客が多く、混雑するので実現が難しい」との回答をいただきました。そして調理講座については既にレシピを作成している出展者もいるとお聞きしましたので、私たちも作ってみました。（右図）



以上の回答を踏まえ、私たちは改めて提案をします。まず、高知市内の各学校の生徒会と連携し、新しく休憩所の設営及び管理をする。そして、子供向けイベントの開催。「はじめてのおつかい」をもじった「はじめての日曜市」。これは児童が安全に買い物できる環境をつくることで、自然と日曜市における若年層、将来の日曜市の顧客を増やすという目的があります。次に、エコバッグの作成及び貸出し。エコに対する意識が高まっている近年、エコバッグも普及しつつあります。しかし、私たちが日曜市で取材を行った際、エコバッグを持参している方が少ないように見え、そこでエコバッグの作成、貸出を行うという提案です。そしてトイレの改装及び増設については、日曜市内でエコバッグの貸出によって資金を捻出するという提案です。

●「各スーパーのサービス　～すべての利用者が利用しやすいスーパーへ～」

私たちは「各スーパーのサービス　～すべての利用者が利用しやすいスーパーへ～」をテーマとして調べ、学習に取り組んできました。テーマ設定の理由は、私たちが普段スーパーを利用するときに思ったことやこんなサービスがあったらいいなと考えていることを明確にし、実際にスーパーの利用者にとって最も利用しやすいスーパーとは何かを考え、すべての人が利用しやすいスーパーへの提案をしたいと思い決めました。

利用者の考えるスーパーのいいところは、宅配サービスなどとは違って、商品を実際に手に取って選ぶことができる、割引サービスデーがある、季節感を出してくれる、電車や歩いての利用者が重いものを買ったときに家まで運んでくれるサービスがあるなどです。改善したらいいと思うところは、障害者や高齢者など足の不自由な人が利用しにくい、スーパーが遠い利用者には不便。大型スーパーには衣類や生活用品などがあるけれど、小型スーパーにはあっても少ないため、大型スーパーが近くにない利用者には不便です。

そして、実際にスーパー2 店舗に行ってきました。まず、1 店舗目の雰囲気はとてもきれいで良かったです。笑顔で元気な対

応をしてくれました。休日の利用者が多い時間帯などには、レジに２人で入り接客してくれるのでとてもスムーズで、利用者にとってはありがたいと思います。品揃えは日用品などもあり、とても良かったです。価格は少し高いですが、品質はいいものばかりでした。２店舗目は、広く明るくいい雰囲気です。通路がとても広く、カートなどのすれ違いもスムーズにできるのでいいと思いました。接客態度は皆さん笑顔で、フレンドリーに接してくれました。品揃えはとても良かったです。高品質・低価格で気軽な買い物ができると思いました。

そして、お店の方にもお話を聞きました。「お店の方針は」という質問に対して、「お客様の豊かな生活のための手助けと応援、当てになるお店、安心して買い物ができるお店づくりをし、品揃えを豊富に、売り切れのないようにしている」というお答えをいただきました。接客で気をつけていることは、「気持ちよく買い物をしてもらうために、『いらっしゃいませ』『ありがとうございます』などの当たり前の言葉に心を込めることを心がけている」そうです。

そのことから、私たちが将来主婦になったときにどのようなサービスがあると嬉しいかを考えて、新しいスーパーを提案します。まず一つ目は、その時期の旬の食材を使ったレシピを置き、試食コーナーを作る。このとき、同じコーナーに使われた材料などを陳列すると、メニューを考える時間や材料を探す手間が省けるので、忙しい主婦などにはとてもありがたいサービスだと思います。そして二つ目の提案は、ファミリー向けの雑貨、アクセサリーショップ、ファーストフード店を併設する。そうすることで、子供や学生などの若年層の利用も増えると思います。

今回の学習を通して、これからスーパーがもっと利用しやすくなったらいいと思いました。そのために、皆さんも気づいたことがあれば積極的にスーパーに提案し、地域の方々や私たち一人ひとりが協力してスーパーを変えていけたらいいと思います。

●「高知県の障害者福祉問題」

私たちは高知県の障害者福祉について調べました。テーマ設定理由の一つ目は、障害者福祉問題は高知県の抱える大きな問題の一つだということです。高知県は、今、日本で最も高齢者の比率が高い県となっています。その中で福祉関係、特に障害者福祉は問題になっていると聞き、自分たちで調べてみたいと思いました。二つ目は、私たちの班員の身内に障害のある方がいて、自分に何かできることがあれば改善していきたいと聞き、このテーマにしました。

私たちは障害者福祉について調べるにあたって、障害者自立支援法という障害者の自立支援推進を図る法律にぶつかりました。この最大の利点は、共通のサービスを受けられるようになったことと、負担金が１割だけになり残りは国が負担してくれることです。また、１割負担になったおかげで利用する人が少しずつ増えてきました。しかしその反面、問題点もたくさんあり、最も大きな問題点は、１割負担があることで利用できない人がいることです。また、法律の内容にも多くの問題があり、障害者に対して優しくない内容もあるそうです。

私たちは法律の運用と障害者福祉の実態を知るために、生活介護を行っている施設へ見学に行きました。サービス内容は、利用者さんを送迎して入浴したり、食事をしたりなど、生活の一部を提供することです。この施設で働いている方と利用者にインタビューをしてみま

した。まず、利用者は、「今の日常生活で不便に思っていることは何ですか」に対して、「外出をするのは簡単ではない。テーブルや洗面台など高さが限定されている。バリアがある」ということでした。「自立支援法について思うところはありますか」と伺うと、「払えない人は利用できないから１割負担をなくしてほしい」という答えが返ってきました。次に看護師の方は、自立支援法については、「利用しやすいサービスを受けられるように、また今のこの現実に対応した新しい法律に改善されればいいと思う」とおっしゃっていました。介護士の方は、自立支援法は、「公平・不公平がある。国が障害者に対してお金を出してくれればいいが、それでは国の政治が成り立っていかない」という答えが返ってきました。最後に、「利用する方が必要とするニーズはできるだけ叶えられるようにしていますか」に対して所長さんから、「利用される方の話の中で要望を聞いたりして、必要としていることを見つける」という答えが返ってきました。また、「自立支援法について思うところはありますか」に対して、「なくてはならないもの。関われていることは嬉しいし、頑張るもとになっている」とのことでした。インタビューをして分かったことは、この支援法に対して改善して欲しいことがたくさんあることでした。その中でどの方からも出たのは１割負担です。１割負担は障害が重いほど金額が高くなり、負担が大きくなります。私たちは、１割負担をなくすことができるのかと考えました。調べてみると財源確保が困難ということが出てきました。しかし、お金がないからと放置しても良いのでしょうか。そこで、高知県独自に何か活動を始めたらいいのではないか、人権教育の一環として高知での財源を作る、ボランティアを増やしたらいいのではないかと考えました。そうすれば、少しでも財源を集めることができるし、ボランティアに参加することによって人権の大切さを理解する人が増えるかもしれません。国は国民のためにいろいろなことをやらねばならないと言っています。この問題はそれに当たると思います。

確かに、今すぐに改善してもらうことはなかなか難しいですが、私たちはあきらめずに国に訴え続けていきたいと思います。このためには、もっとたくさんの人たちに福祉の実態を知って欲しいと思います。

●「食材（もの）と心（ひと）を繋げよう!!」（特別賞受賞）

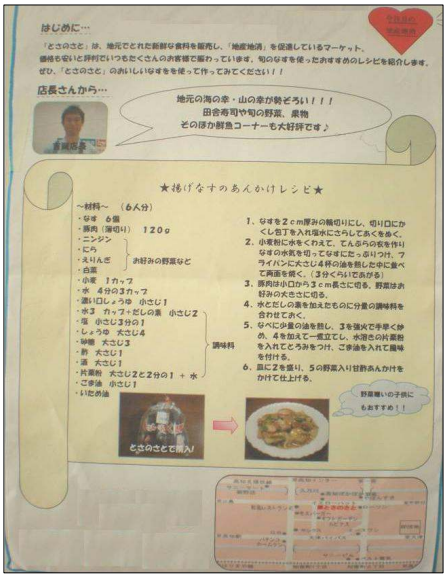
私たちは「食材（もの）と心（ひと）を繋げよう!!」という題目で、マネジメントの発表をします。

「高知を活性化しよう」というテーマに基づいて、私たちは地産地消という言葉に注目しました。地産地消とは、地域で取れた食材を地域で消費することです。そして、それは生産者の生きがい、消費者の安心・信頼へ、人と人との繋がりを作っていきます。現在、生産者と消費者の距離が遠ざかる中で、消費者は様々な食の事件が起こっていることもあり、食の安全に対して不安になります。そこで地産地消をすることにより、新鮮で安心、信用のある地元のものを手に入れることができるわけです。それに加え、旬や食文化への理解、食糧自給率の向上、地域の活性化へもつながっていきます。

では、地産地消の知名度はどれ程のものなのか。様々な年齢層の方々の協力を得て、アンケートを取りました。Ｑ１「地産地消とは何か知っていますか」という質問に、(89%が「はい」と回答）ほとんどの人が関心を持っているようです。そしてＱ２「地産地消の取り組みを知っていますか」という質問に 72%の人がノーという回答でした。このように、言葉は知っているのに実際に行われている活動は知らない人が多いことが分かります。最初、この結果を見たとき「意外だな」と感じましたが、私たちもあまり実際の活動について知らないことに気がつきました。

そこで、どのような活動が地域で行われているのか知るため、県地産地消・外商課でお話を伺いました。この課では、地産地消を促進するためにイベントを企画したり、スーパーや直売所をバックアップしたり様々な活動を行っています。そしてお話を伺う中で、地産外商という今まで聞いたことのなかった言葉について学ぶこともできました。地産外商とは地域で取れたものを外へ広く発信することです。地産地消ばかりに注目していた私たちは、このときは地産外商にあまり関心はありませんでした。次に訪問したのは直売所で、ここは地産地消で成り立っています。仕組みは、会員登録をしている農家の方々が朝この直売所へ農産物を置きに来るというものです。次に訪問したのは、高知市内のスーパーです。ここでは、地域の野菜や果物などのコーナーを作ったり、県内産牛肉の販売を行ったり、地産地消に取り組んでいました。お客様にインタビューも行ったのですが、たくさんのお客様に好評のようでした。主な意見としては、安心できる、新鮮であるなどがありました。

実際にいろいろなところへ出向いてお話を聞くと、自分たちにどれだけ知識が不足していたのかよく分かりました。事実 72%もの人が詳しい活動内容を知らないというのが現状で、問題点はＰＲ不足ということになります。



そこで「高知を活性化しよう」と、私たちは地産地消が少しでも広まるよう行動を起こしました。活動その１として直売所とスーパーの協力を得て、ＰＲのためのチラシを作成しました。お店の紹介と旬の地域の野菜やお肉を使ったレシピ、地図などを載せ、帯屋町にて 100 枚ほどの配布を行いました。たくさんの方が興味を持ってくださり、この活動が少しでも地産地消に貢献できたのではないかと嬉しくなりました。そして、活動その２としてレストランの協力のもと、ケーキバイキングに登場するスイーツの開発のお手伝いをさせていただきました。私たち高校生が作ったかぼちゃのプリンとクッキーがあることを広めれば、

同世代の学生たちなどがレストランの地産地消に興味を持ってくれるのではないかと考えたからです。実際に私たちも食べに行き、お客様の声もインタビューしました。すると、「かぼちゃの味が生かされていておいしい」などの声があり、地産地消に興味を向けていただけたのではないかと思います。

このような活動の中で、私たちは更に新たな課題に直面しました。それは地産地消だけを進めても高知は活性化しないということです。そこで、これまでの活動も思い返しながら考

えてみたところ、地産外商という言葉がキーワードなのではないかと思いつきました。地産外商の活動で地域にお金を入れ、その中で様々な利益がある地産地消を促進することが高知の活性化において大切なのではないかと考えたのです。

私たちがこの課題に対して提案することは、地産地消と地産外商の並行促進です。やなせたかしさん創作の「高知の野菜 11 人きょうだい」のキャラクターは県外に出荷される高知県産の野菜などのパッケージに載せられていますが、まだまだ知名度が低いです。そこで、私たちは近々東京に設置されるアンテナショップと併せて、このキャラクターたちをＰＲすることを提案します。方法は、やなせたかしさんに子供向けのショートストーリーを作成してもらい、インパクトのあるＣＭを作ることを考えています。小さい子供や野菜嫌いの子供もこのキャラクターたちを見たら、野菜を食べてみようという気になるのではないかと思います。つまり、まず初めは子供たちをターゲットにしてみてはということです。

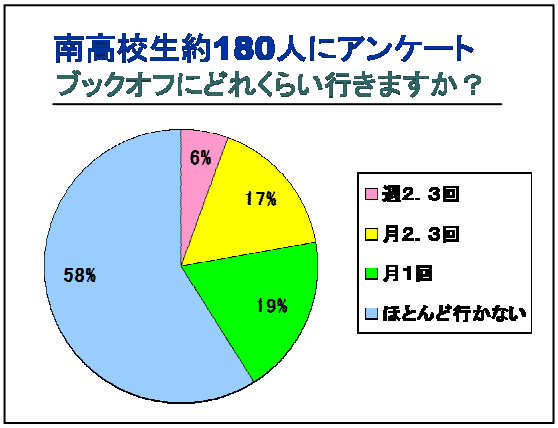
最後に、このマネジメント学習を終えての感想です。地産地消に関わることによって見えてきたもの、それは高知の良さでもある人々の温かさでした。地産地消をはじめとする地域活性化も、人々の温かさがあるからこそ実現しているのではないでしょうか。

●「１億人が行きたくなるブックオフ」（プレゼンテーション賞受賞）

最初に、ブックオフについて簡単に説明します。ブックオフは、それまでの古本屋の形を打ち破り、新古書店と呼ばれる新しい古本屋を作り上げました。店内はコンビニエンスストアのような照明にし、店舗面積を広めに取り、立ち読みも可能となっています。また、古本屋の店先などに従来よく書かれている「本買います」という言葉は、店員が客より上の立場から言っているという点から、お願いする口調の「本お売りください」にしたことが成功の要因とも言われています。ブックオフは店舗数も多く、案外近くにあったりします。しかし、そんなブックオフも利用の回数を重ねていくうちに、問題点が目につくようになりました。そんな問題点を中心に調べて、より良いブックオフになればいいと思ったのがきっかけです。

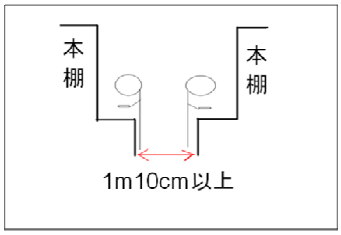
高知市内には六つのブックオフがあります。まず各店舗を回って問題点を探すことにしました。一つは、通路が狭いことが挙げられます。立ち読みをする人などが通行の妨げになったり、通路をふさいでしまうのです。また、アダルトコーナーが隔離されていないことが挙げられます。やはり未成年者のためを考えると、教育上のこともあり、隔離すべきだと思います。その他にもレイアウトが少し分かりにくいなどの問題点も挙げられました。

次に良いところは、ある店舗では接客が徹底されています。入店すると必ず「いらっしゃいませ、こんにちは」と多くの店員さんが言ってくれます。駐車場の数も多いので、駐車する場所に困ったりすることはあまりないと思われます。いろいろと気を遣われているのか、あまり問題点がなくて良かった店舗もあります。インタビューにも丁寧に対応してくれました。「お客様によりよく利用してもらうためにしていることは何ですか」、「うーん、お客様に本を売っていただけるようにしていますね。あと整理整頓にも気を遣っていますよ」。「普段から気を遣っていることは何ですか」、「いつも笑顔でいることですね。心から挨拶がモットーです」。「最後に、お客様にこれはされては困るということはありますか」、「うーん、座り読みをされると困りますね。他のお客様の迷惑になってしまうので」と、店側も何かと大変そうでした。



続いて、南高校生約 180 人にアンケートをしてみました。まず「利用頻度」については、ほとんど行かないが多かったですが、（右図を見ると）この人は月に１回、この人は週に２、３回行くと想像してみると、かなり利用されていることが分かりました。次に、「よく購入するものは何ですか」と聞いたところ、ずば抜けて単行本が多かったです。このデータをブックオフの方々に参考にしてもらえればと思います。続いて、「ブックオフで立ち読みをしたことがありますか」という質問をしてみると、70%の人が「ある」と答えました。更に、立ち読みをしたことがあると答えてくれた人に、「その本を購入したことはありますか」と聞いてみたところ、42%の人が「ある」と答えました。立ち読みが可能となっているのは、なかなかいいことだと分かりました。

これまでのデータを基に、理想のブックオフ像を作ってみました。まず接客が徹底されていること。実験して、通路の幅が１m10cm 以上あると通行が遮られたりせずに普通に通れることが分かりました。次にアダルトコーナーが隔離されていること。また本棚はこの型（右図）を利用していること。この型の利点は、立ち読みの際スペースを無駄に取らせない、商品を探すときしゃがまなくてもいいことです。またレイアウトが分かりやすいこと。最後に、扱う商品が多いことなどが挙げられます。



今回の調査で分かったことを基に、提案したいと思います。まずレイアウトが更に分かりやすくなるように、店内のどこにどんな商品が置いてあるか分かる地図のようなものを看板として入口近くに設置するのはどうか。また問題点として挙げられたアダルトコーナーは、隔離または奥の方へ移動することはできないだろうか。最後に、古くなった本などを高知県と連携して貧しい国に提供できないだろうか。高知県がブックオフに必要な資金を提供し、ブックオフは本を貧しい国に提供する。これだと県の売り込みにもなりますし、ブックオフの宣伝にもつながります。今まで調べてきたことを見直してみると、やはりすぐ改善できる問題点は少ないようです。それだけブックオフは今に至るまで努力してきたんだなと思いました。今後の課題としては、ブックオフの良いところを更に伸ばし、新しい発想を見つけ出すことだと思います。

●「アンパンマンで高知の活性化」（アイデア賞受賞）

今回、私たちは、観光客を増やすことでその経済効果を期待し、高知県の活性化を図ろうと考えました。そのためには、県外からでも足を運んでもらえるような魅力的な施設やイベント、食べ物が必要です。高知をより活性化させ、大人から子どもまで楽しめる町へと発展させるためには、何を利用し、またそれを県内外にどのような形でＰＲしていけばよいのかを考えました。そこで着目したのが、高知県出身の漫画家であるやなせたかしさんの作品、アンパンマンを前面的に高知県のシンボルとして活用していく方法です。ゲゲゲの鬼太郎を前面に押し出した鳥取県境港市の水木しげるロードを参考にし、子どもから大人まで馴染み

の深いアンパンマンのネームバリューを活用することで、多くの人々を高知に呼び寄せ、県内外から注目を集めることができるのではと考えました。

まず、現在どのような形で高知県内でアンパンマンが活用されているのかを調べてみました。原作者のやなせたかしさんの出身地である香美市香北町のやなせたかし記念館アンパンマンミュージアムをはじめとして、南国市のやなせたかしロード。また身近なところではアンパンマン列車や電車、バス、そして高知駅のアンパンマンテラス、そのほか至る所にキャラクターが活用されています。全国的にもいくつかのアンパンマン関連施設があり、たくさんのお客さんが訪れているようです。

この調査結果を基に感じたことは、高知県内でのアンパンマンを活用した取り組みは、それぞれが素晴らしい内容ですが、実際に県外客へのアピールや認知という点では、残念ながら高知県の活性化に結びつかない大きな課題があると考えます。その課題を改善し、アンパンマンを活用するために、普段から子どもと接している保育士さんにアンケートにご協力いただきました。「県外の観光客に対して、アンパンマンを利用したどのような施設があればよいか」という質問に対しては、「キャラクター満載のレストラン、高知限定のグッズを多数取り扱うショップ、キャラクターと遊べるテーマパーク、みんなが利用できる図書館」などの意見が多く寄せられました。また「ミュージカルショーやパン作りが体験できるジャムおじさんのパン工場、ＳＬマンやバイキンＵＦＯ型の乗り物、楽しく学べるミミ先生の小学校」などの意見もありました。私たちは、アンケートや調査を基に話し合った結果、これまで以上にアンパンマンのキャラクターを活用し、高知県全体をアンパンマンで溢れさせることが高知県のイメージアップに繋がるという答えにたどり着きました。

アンケート結果

必要な施設

キャラクター満載のレストラン
高知限定グッズ中心のショップ
アンパンマン達と遊べるテーマパーク
みんなが利用できる図書館

そこで二つのことを提案します。まずは、高知市内をアンパンマンのテーマパーク化するという提案です。その具体案として、一つ目に西武跡地へのアンパンマンミュージアム型複合施設の建設を考えています。１階を高知限定のグッズを取りそろえたショップやレストランを含むショッピングモールフロア、２階・３階を親子でパン作りなどを体験できるコーナーやアンパンマンの世界を疑似体験できるジオラマコーナーなどのミュージアムフロア、４階を子育てや食育に関するさまざまな悩みや相談などができる子育てフロアにするなど、子どもから大人まで楽しく過ごせる施設があればと思います。私たちが提案するような施設ができれば、（高知市文化プラザ）かるぽーとや（はりまや橋観光）バスターミナルとの連携を図ることができると思います。

二つ目に、高知駅からはりまや橋までの歩道と帯屋町アーケード街をアンパンマンロード化することを考えています。水木しげるロードや香北町、南国市などの取り組みにならい、子ども目線のモニュメントを設置したり、装飾だけでなくマンホールや信号機、街灯など交通に関して必要不可欠なものにも広くアンパンマンを利用できたらと思います。そうすることによって、アーケードの活性化や高知城、ひろめ市場などへの相乗効果が期待できます。

三つ目に、中央公園やわんぱーくこうちでゴールデンウィークや長期休暇を狙い、定期的

にアンパンマンのミュージカル的ショーを行いたいと思います。これはアーケード内で買い物をする観光客の増加やわんぱーくこうちへの移動など電車利用の機会を増やすことで、さまざまな経済的相乗効果の期待ができるのではないでしょうか。また、クリスマスイベントとして、ショーやイルミネーションなども有効であると考えます。

二つ目の提案は、高知県内の大学へのアンパンマン学科の設置です。アンパンマン学科とは、アンパンマンをはじめとするマンガやアニメをさまざまな視点から捉えることで、人間としての幅を広げ、柔軟な発想や受容性を養い、より自分らしく生き抜く力を持った人間の育成を目的とした学科です。アンパンマン学科ではアンパンマン生活コースとアンパンマンマネジメントコースの二つに分かれ、アンパンマン生活コースではアンパンマンを利用した子どもの心理についての学習を深め、アンパンマンのアニメの世界から子どもたちへ向けた食育を中心に考えていきます。その中で地産地消を目的に高知県産の食材を使った料理法の研究やアンパンマン弁当の研究、年に１回、アンパンマン弁当コンテストを開催するなど、子どもの好き嫌い解消に力を入れたイベント等の開催など、幅広く活動していきます。アンパンマンマネジメントコースでは、マンガ大国としての日本について理解を深め、海外に与える影響などグローバルな視点から捉え、それによる問題点や打開策を考えていきます。また、新しい商品開発や提案を主とし、マンガやアニメを利用したまちづくりや活性化を目的とした提案をさまざまな方面から考え、マネジメントできる知識と能力を養います。なお、アンパンマン生活コースについては、大学の先生から「食育に留まらず、子どもたちのことまでも学習できるなど発展性も十分にあり、そういった点からも評価できる」という温かいお言葉をいただきました。

私たちは１年間のマネジメント学習を通して、高知県の現状を垣間見ることができました。今回、アンパンマンの力を借りた高知の活性化を目標に調査研究し、提案した内容を実現するには、資金や立地場所等のさまざまな面において多くの問題点や課題があり、簡単に実現できるものではありません。しかし、この高知県の素晴らしい自然や偉人の足跡、おいしい料理など高知県には観光資源がたくさんあります。暖かい風土や高知の人々の素晴らしさを県外のたくさんの人々に触れてもらいたい、高知を活気のある町にしたい、そのためにはやはりアンパンマンという存在が必要不可欠であると考えます。高知県の明るい未来のために。

●「動物愛護について　～わたしたちに出来ること～」（マネジメント大賞受賞）

皆さんは動物を飼ったことがありますか。私たちはペットとして犬や猫を飼ったことがあり、全員動物が大好きです。現在メディアでは動物を取り上げている番組などが多くあり、日頃からよく目にすることがあります。その背景にあるのは、近年加熱しているペットブームです。しかし、その裏では、動物虐待、放置などの問題があります。そこで今回、高知県の動物愛護の現状と私たちが彼らにできることについて調べることにしました。

高知県では年間犬 1,694 頭、猫 5,929 頭が殺処分されています。人口当たりの捨て犬、捨て猫が処分される割合は、全国で高知県がワースト１位です。そこで、帯屋町にいる 100 人の方を対象にアンケートを取りました。「今までに捨て犬、捨て猫を見たことがありますか」の質問に「はい」と答えた方は 87%、「いいえ」と答えた方は 13%でした。では、約９割の人が見たと答えた捨て犬、捨て猫はどのような理由で捨てられてしまうのでしょうか。１位

計画外の繁殖 51%、２位 不明 17%、３位 飼育者の病気・入院７%。２位の不明とは、飼育する目的がなくなったなどの理由です。

次に、「捨て犬、捨て猫を拾ったことがありますか」という質問をしました。先ほどの質問で「見たことがある」と答えた人が 87%だったことに対し、この質問で「はい」と答えた人はその半数以下の 39%でした。そのことから、約５割の人が彼らを見て見ぬふりをした、または何らかの理由でそのままにしたということが考えられます。では、そのまま放置された犬、猫はどうなってしまうのか。

処分日が早い順に分けられている。

私たちは、飼い主が分からない野良犬や野良猫が管理されている高知市小動物管理センターを訪れ、職員さんが丁寧に教えてくださいました。動物の愛護および管理に関する法律など、私たちが思っていた以上に問題は複雑に規制されていて、改めて考えさせられました。お話を聞いた後、実際に犬や猫たちがいる犬舎を見学させていただきました。犬舎の外には子犬がいて、その子たちは譲渡会に出すとおっしゃっていました。譲渡会は月に１回行われていて、ここに連れてこられた犬、猫たちの新しい飼い主を見つけるものです。このとき、また同じことが繰り返されないよう、職員さんたちが注意を促しています。しかし、成犬や人馴れしていない犬、譲渡会でもらわれなかった犬たちは数日後処分されてしまいます。

ドイツでは、動物の殺処分数が０、処分場も０です。動物を飼いたい人は国が指定するブリーダーか動物孤児院に行き、動物を譲り受けます。動物孤児院とは、保健所のようなところですが、そこでは処分という言葉はなく、もらわれていくか、そこで生涯を過ごすかのどちらかです。ドイツでは、動物ではなく飼い主のしつけや犬税、アニマルポリス、公共の施設などで飼育をするなど、動物を飼うことの責任の重さを訴えかけています。これらにより動物に対する関心が高く、トラブルが起きにくいのです。かつて、熊本市では高知市と同じように処分数が多く、問題になっていました。しかし、今年処分数が０になりました。処分数を減らすのではなく、０にすることを目標にし、取り組んだ結果だそうです。私たちは熊本市の方からお話を伺いたいと思い、電話でインタビューをさせていただきました。まず、「なぜ０を目指そうと思ったのか」という質問をしました。一番の理由は、平成 12 年に国で法律が改正されたのを受け、熊本市動物愛護協議会を作ったからです。これは、保健所と愛護団体の結びつきを強くし、譲渡する犬を１匹でも増やそうというものです。次に、「０にするために具体的にどのような取り組みをしているのか」という質問をしました。譲渡会が行われる日時を詳しく宣伝したり、ホームページ上で１頭１頭その犬の性格などを詳しく掲載するなどの啓発運動に取り組みました。

高知県の現状、他国、他県の取り組みなどを調べた上で、私たちが提案したいことは二つです。提案１、ペットショップやブリーダーなどで、買い手に誓約書のようなものを配付してもらう。この提案から自分たちで誓約書を制作しました。「１から 10 の約束」は「The Ten Commandments of Dog Ownership」を日本語にしたものです。そこで、実際にペットショップへ行き、私たちが作った誓約書を提案してきました。「私たちもそのようなものを作って渡し

ています。以前は口頭のみでしたが、文字にすることで更に伝わりやすくなると思います」とのことでした。提案２、公共の施設で飼育する。飼い主のいない犬、猫を刑務所や小学校などで飼育します。犯罪者の改心につながり、子供の頃から動物と触れあい飼育することによって、愛護心・責任意識を持つようになります。これを職員さんに提案してみると、「いい提案ですね、実際にドッグセラピーといって既に行っているところもあります」とのことでした。

今回私たちがマネジメント学習で発見したことは、まず社会は繋がって成り立っているということです。何か問題を一つ取り上げただけでも、経済的な課題や法律面での問題など様々な障害が二重にも三重にもなってあります。次に、伝えることの難しさ、大切さです。この半年間で調べたこと、伝えたいと思ったことを全て発表することは難しいことです。限られた時間の中で、どうすれば私たちの思いが伝わるのかと試行錯誤を繰り返し、今日に至りました。それらの発見を含め、普段の学校生活で感じることのない社会は、私たちにとってとても貴重な体験となりました。

最後に、今日も、もしかしたら今この瞬間も、どこかの自治体の動物愛護センターでは小さな命がなくなっていっています。その悲惨な現状を作ってしまったのは私たち人間であり、彼らを助けることができるのもまた、私たち人間です。かわいそうと思うだけではなく、具体的な行動を起こしましょう。今日私たちが発表したこの現状を友達や家族、身の回りの一人でも多くの人に伝えてください。知ることから意識は変わっていくのです。そして、動物と共存する明るい高知県、高知南中・高等学校から発信していきましょう。

～　休　憩　～

４　プレゼンテーションに関する質疑応答

●「高知城のお膝元　日曜市」

知事：　確かに日曜市は高知県が全国に誇るもので、日本で一番古くて長い街路市だそうです。ちなみに、路面電車も日本で一番古くて長いです。そういう日曜市を全国に誇る高知の強みとして生かしていきたいです。「高知城からはりまや橋商店街、かるぽーとくらいまでの東西の部分をどうやって元気にさせていこうか」、今、高知県と高知市で一生懸命プランを練っています。この東西の軸は、山内家の藩政時代から高知県の中心です。大河ドラマ「龍馬伝」があり、そのパビリオンなどにたくさんのお客さんが来てくれるでしょうが、これも 1 年で終わります。終わった後でもお客さんが来てくれて、観光客もたくさん呼び込むことのできるような高知市の中心部をこれから作っていきたいと思っています。

例えば、一つの大きなテーマが、日曜市をどうするかです。アンケートを取ったら、「休憩所が欲しい」、「トイレが少ない」という話が多かったのは、確かにおっしゃるとおりで課題かもしれません。高知市は、人手不足と財政難で少し難しいというお話ですが、ぜひそういう形でものごとを進めていければいいなと思っています。よく考えてみたいと思います。

それから「はじめての日曜市」という児童を中心としたイベントは、なるほどと思

いました。例えば具体的にどのようなことをやろうと考えていますか。

生徒：　**「はじめてのおつかい」というテレビ番組みたいな感じで、小さいお子さん方を持っているお母さん方とかに日曜市に来ていただいて、日曜市内だけでお買物をしてもらおうと思っています。例えば、小さいお子さんたちがネームの札をかけて、「これとこれを買ってきて」とお母さんに頼まれたものを一生懸命探して買ってくるということをしていただきたいなと。日曜市内でしたら、人の目もあるので安心してできるのではないかと思いました。**

知事：　先ほど私が言ったように、これから高知県は地産地消のみならず、地産外商を進めていかなければいけません。観光客の皆さんに高知に来てもらい、お金を使ってもらうことも地産外商です。観光客の皆さんがたくさん来てくれるようなまちづくりをすることは、これからの高知県にとってすごく大切な課題だと思います。高知県内だけだと人口が減っているのだから、その分観光客の皆さんに来てもらって、にぎわいのある町にしていきたいと思っています。日曜市は県外からのお客さんですごくにぎわっている、観光客を呼べるまちづくりができているところです。だから、高知県の本当の強みだと思います。日曜市をもっと伸ばしていきたいですから、今回いいアンケート調査をしてくださり、私たちにとっても本当に役に立つと思っています。「観光客を呼べるまちづくりはどんなだろう」と今後も考え続けていただきたいと思います。

教育長：　このアンケートすばらしいです。せっかくアンケートをして、すばらしいデータを持って高知市役所に乗り込んだけれど、色好い返事をもらえなかった。世の中に出ると、こうしたらいいと分かっていてもできないことがよくあります。それも一つの勉強だったかもしれませんが、でも核心を得た調査と提案だと思います。市役所ができなかったら、ではどうやってやろうかと考えたところもすばらしいと思います。

知事：　やったらいいに決まっているけどなかなかできないことも、どうしてもあります。幾つか理由があって、お金がない場合、お金がないのに加えてやらなければならない、やった方がいいと思うことが複数ある場合がある。そのうちのどれからやるのが一番いいか優先順位をつけることがあります。例えば日曜市でもいろいろな政策をやっていますが、その中でもまだ優先順位が低いからこれは少し先に置いてということもあったりします。社会に出たらそんなことばかりだと思います。ただ、このアンケートを見ると優先順位が高そうです。

●「各スーパーのサービス　～すべての利用者が利用しやすいスーパーへ～」

知事：　スーパーをテーマにしてみようと思ったのはどうしてですか。スーパーへはよく行きますか。

生徒：　**親と一緒に行くことが多いです。自分たちが女性ということもあって、将来自分が**

家庭を持って、家族の健康とかを考えて料理をするにあたり、やはりスーパーを利用することが多くなるのではないか、一人暮らしをしてもスーパーを利用して生活をしていくと思ったのでこのテーマにしました。

知事：　漠然と使うだけではなくて、自分たちが使っていて、「もっと便利でいいものにするためにどうすればいいだろう」と考えるところがすごいです。自分たちのニーズから考えてものを良くしていくことは、例えば政策でも、商品作りとかどんな面においてもよく使われる手法だと思います。この提案１、「店内で食材を探す手間が省ける。その時期の旬のものを使った料理のレシピを置き、試食品を作る。そのコーナーで関連の材料も陳列」とあります。これは、フェアとかをするときに使われる手法かもしれません。今度、高知県が東京の銀座にアンテナショップを出しますから、こういう手法はぜひ生かしていきたいと思います。

「その時期の旬のものを使った料理のレシピを作る」と書いていますが、新しいレシピを考えることは、その食材の可能性を広げていくことです。例えば、カツオと言ったら昔はたたきだけでした。段々新しく、例えば塩たたきが開発されたりして、それで多くの人がカツオを食べるようになりました。実際は、カツオを使ったイタリア料理のカルパッチョとかいろいろなものに使えるそうです。だから、そういう形で食材の食べ方、レシピを開発していくことは、実は高知県の食材の売れ行きを伸ばすことにつながっていくのではないかと思っています。今後、東京でアンテナショップを開くときには、レストラン機能を持った場所も作ります。そこで高知の食材を使った新しいレシピを開発して、多くの東京の人に見せて、感動してもらって、もっと高知の食材を手にしてもらい、高知県を元気にしていこうと考えているところです。同じような発想だと興味深く思いました。

あと一点、スーパーの悪いところとして「スーパーが遠い利用者には不便」と書いています。今、「高知県の中山間地域に住んでいる人たちの暮らしをどうやって守っていくのか」が大きな課題になっています。中でも山の奥の方には、例えば水道がないところもありました。簡易水道をつけてだいぶ良くなっていますが、買い物がしづらいとか、病院に行くのが大変だという課題がたくさんあります。皆さんが行かれたスーパーは、移動販売車を作って中山間地域へ車で売りに行ってくれています。それによって、スーパーがない地域の皆さんが買い物できたりしています。地域によっては、町にある商店の人が軽トラに品物を積んで、それぞれの地域に運んで、皆さんの買い物を支えているところもあります。でもなかなか大変で、これをどうやって維持するのかは今後の大きな課題になっています。段々高齢化や過疎化が進み、車で遠いところまで買い物に行くのがきつくなっている人たちがたくさん住んでいる集落も高知県の中にはたくさんあります。スーパーそのものの話ではないかもしれませんが、そのようなことも考え続けてもらえればと思います。

教育長：　女性らしいテーマ選びで、将来自分が主婦になったときを意識して調べたと思います。一つのお店だけではなく、２店舗で比べてみたのは良かったと思います。「提案

の前段にお店の人に聞きました」ということですが、提案１、提案２を持ってお店の人に聞きに行きましたか。

生徒：　**実際にまだお店の人には言ってないです。**

教育長：言ってみたらどうでしょうか。提案１は、お客さんがもっと便利になるように魅力アップすることで、結構おもしろいと思います。提案２は、なぜアクセサリーショップやファーストフード店が併設されていないのでしょう。スーパーの人がどういう戦略を立ててお店を運営しているのかを聞いてみたらおもしろいのではないでしょうか。私が想像するに、皆さんは学生さんですから、「子供や学生など若い人がもっと行けるようなお店になったらいい」と思っていますよね。お店の人はそう思っているでしょうか。つまり、若い人に来てもらうためにファーストフード店を作ろうとすると面積が要ります。その面積の中で、今とファーストフード店を作った方とどちらの売り上げが多いでしょうか。何かの考えがあって、スーパーはこのような作りになっているのかもしれないです。もう一回聞いてみたらいいですね。おもしろいテーマでした。

●「高知県の障害者福祉問題」

知事：　障害者自立支援法のことは、よく調べましたね。これは今、非常に議論になっている問題です。今回皆さんがいろいろな方にアンケートを取られたので、より生の声が私も学べました。少し難しい言い方をしますと、１割負担の問題というのもありますが、応能負担と応益負担問題。障害者自立支援法は、障害を持っている方がサービスを受けると、それに伴って１割分お金を払う仕組みになっています。だけど、所得が低い方は払わなくていいという仕組みに元々なっていなかったので、すごく反発があったりしました。それから、リハビリの期間が一定期間を超えると出ていかないといけなくなったりと多くの問題がありました。それで、所得の低い方については特例が少しずつ作られて、今はもうモザイクみたいな制度になっています。この障害者自立支援法の話は、今の政権下で見直すと思いますが、社会福祉の関係について日本全体でいうと、なぜそのように厳しい制度を作らないといけなかったのか。皆さんがひどい制度だと言っていたそれを作った人は、ひどい制度、大変な制度だと分からなくて作ったのか、それとも意地悪だったのか、どう思いますか。

生徒：　**それは違うと思います。**

知事：　社会保障の分野、障害者福祉問題、高齢者の年金の問題もそうですが、毎年必要なお金がどんどん増えています。ところが日本全体で使えるお金は増えている状況ではないので、何とかして社会保障に必要なお金を抑えられないか、もしくはサービスを受けている人がもう少し負担する仕組みにできないかを、ずっと議論してきました。障害者福祉でも受ける利益に伴う負担をすることを制度として入れようとしました。

今後、社会保障の問題は大きな課題になって、高知県だけではなく、日本全体で議論され続けていく問題だと思います。みんながずっと使っていけるような制度を保つためには、一定の負担をしてもらうことも必要。だけど他方で、そういう厳しい議論をするときには必ず、特に立場の弱い人のことを考えた対応をしっかり考えるのもまた必要なこと。この両方のバランスを取った議論を今後もしないといけないと思います。

最後に、高知県独自の方式を作るという話。少し辛いことを言うようですが、障害者自立支援法でかかるお金を高知県だけの財源で全部賄うことはとてもできません。ただ、日本全体でこの障害者自立支援法は必ずいい方に見直しがされますから、その点は見ていて欲しいと思います。

もう一つ、実は高知県独自の福祉をやろうとしています。高知県内 34 市町村の中に障害者施設が全然ないか、もしくは一つしかないところが半分くらいあるのはなぜか。それは、国が決めた障害者施設のスタイルは、人数が少ない高知県では成り立たないからです。例えば、国の基準では、障害者施設は 20 人以上利用者がいて、職員が５人いないと補助金を出さない仕組みになっています。東京などでしたらすぐに 20 人集まるでしょうが、高知県だと人口が少ないから 20 人も集まりません。３人しか集まらなくても５人職員を置かないといけないという規制になっていますので、採算が合わず社会福祉施設ができないことがたくさん起こっています。

それで今、高知県の独自の制度として小規模多機能型施設「あったかふれあいセンター」を作ろうとしています。障害者の方も、介護を必要とされる方も、子育て支援をやろうとする方も１箇所に集って、いろいろな社会福祉サービスを提供できるようなものを作ろうとしています。障害者だけ、介護だけ、子育てだけだと人数が揃わなくても、その三つを合わせればそれなりに人数が揃う。それを支えることができる「あったかふれあいセンター」を県内で 30 箇所以上作り、その中身を今後もっと充実させていきたいと考えています。高知県のように過疎、高齢化、人口減少が進んでいるところの福祉のありようを、国とは関係なく高知県独自で追求していこうとしています。それも勉強してみて、いろいろな提言などをいただけるとありがたいと思います。

生徒：　ボランティアを増やすことについては、私たちが行った障害者施設やその他の施設に、小学生、中学生、高校生をボランティアとして送って、一緒に物を作ったり、お話をしたりして人権の大切さを勉強して、成長してもらえればという考えもあります。

知事：　ボランティアを増やすためにも学校教育の段階から現場で勉強することは確かに有意義なことだと思います。「あったかふれあいセンター」も地域の多くのボランティアの方に支えてもらっています。ボランティアの助けがないと、高知県では一人暮らしの高齢の方、障害を持っておられる方を支えていくのは難しいと思います。皆さんもボランティア活動に参加して頑張っていただければと思います。

教育長：非常にタイムリーなテーマです。これは、勉強すればするほど悩ましいテーマではなかったですか。簡単に言えば、お年寄りの数が増えて、若い人の数が減っている。

社会福祉サービスは充実したらいい。しかし、充実するもとは働いている人の税金です。だから、そのバランスの中でやっていかなければいけない。どうしたらいいのかは、実は簡単には分からないです。どうしたらいいかと思い考える、社会に出たらこのようなことばかりです。そういうことを考えるのは非常に大事で、解決策がでるまでに幾つものクエスチョンがあって、考えた末にボランティアを増やすことに行き着いたんですよね。ボランティアを増やすことは、私も正解だと思います。でも、プレゼンでは「悩んだ末にこの結論になりました」とあったら、もっと良かったと思います。

これからの日本は税金で全部やっていくことは無理だと思いますから、できる人が手助けをしていく社会の仕組みを作らなければいけません。ですから、ボランティアに目を向けたのはすばらしいことです。そういう心根を持っている生徒がいたことを大変嬉しく思います。すばらしかったです。

●「食材（もの）と心（ひと）を繋げよう!!」（特別賞受賞）

知事：　地産地消と地産外商の話はおっしゃるとおりで、私も全く同じ考えです。最初に地産地消を徹底していくことがまず第一で、その上で地産外商もやっていかないと高知県はじり貧になるという話をしました。なぜ地産地消を進めるといいのか。安心、新鮮、信用もあるし、食糧自給率が増加することもあるでしょう。併せて、地域の人が地域のものを食べれば、その地域の生産者が元気になります。お金も儲かり、お互い元気にし合っていこうという発想で、地産地消はいいと思います。

ただ、高知県の経済自体が小さくなってきているので、併せて大切なことは、地産外商、外からお金を稼いでくる力を持つことだと思っています。高知県は、高知県の外とのやりとりで県際収支が赤字です。県内の経済が小さくなっている上に、県外にどんどんお金が出ていっているから、高知県はなかなか豊かになれないのが現実の話です。でも、愛媛県や香川県は県外とのやり取りで黒字です。例えば、うどんを作ったり、観光客をたくさん呼んできて儲けていたり、いろいろなことをしています。経済を元気にすることがやはり必要で、そのために地産外商を進めることが重要だと思います。どういう地産外商を進めていったらいいのかをぜひ今後も考えて、アイデアを出していただければと思います。チラシを配ってきたことは、本当にすごいですね。それからプリンはおいしそうでした。

最後に、やなせたかしさんの高知野菜のキャラクターは皆さんが見てもいいと思いますか。

生徒：　はい。

知事：　もっと使いましょう。確かにスーパーで子供の食いつきがいいと聞きました。これ

でショートストーリーを作って、インパクトが大きいＣＭを作って、「おひさまの味、高知野菜」でＰＲの仕方を考えてみましょう。なぜ「おひさまの味」というか知っていますか。高知県は日照時間が全国第１位、降雨量も全国第１位となることがよくあります。たくさん雨が降って、たくさんお日さまの光を浴びているからおいしい野菜が取れます。食べ物がおいしいところ、「おひさまの味」と売り込もうとしています。

教育長：このテーマは、知事のために作ったようなテーマですね。（笑）以前、私は、この野菜 11 人きょうだいを名刺に使っていました。やはり子供さんに評判がいいです。実はその当時、私は中国に行きました。ある運河で小学生がひしの実を取って食べていたので、「おんちゃんにもちょうだいや」と言って、いただいて食べたんですが、何にも渡すものがないから、子供が喜ぶのではないかとこの野菜 11 人きょうだいが入った自分の名刺を見せると、「かわいい」とすごく喜びました。このショートストーリーの作成がうまくいけば、確かにインパクト大だと思いますので作戦として使っていったらと思います。ご提案ありがとうございました。

●「１億人が行きたくなるブックオフ」（プレゼンテーション賞受賞）

知事：　日本国民だったら誰でも行きたくなるようなブックオフにしようということですか。こうやって比べてみると確かに面白い。どう改善すればいいのかを比べてみることで改善点がよく見えてくるでしょうね。通路の横幅が１m10cm 以上で、本棚がこういう形になっているのがいいというのは、素晴らしいです。今後お店を作る時に、多くの人が参考にしてくれるかもしれないですね。

生徒：　最低ラインなので、本を読んでいる人が少し後ろにずれたらもう少し広げないといけない、もう 10cm、20cm 広い方がいいかなとも思います。

知事：　私は、ブックオフを調べてみようとした時に、１店だけではなく、いろいろな店を回ってみたことは調査の仕方として優れていると思います。本当の姿が見えてくることがあると思うんです。ただ、もしかしたらそれぞれの店の特徴は店の立地にもよるんでしょうけどね。だから一概に比べられないかもしれませんが、例えば駅前だという条件は一緒にしてみて、だけど入っている人の数が全然違うとしたら、どこに違いがあるのかを調べてみると、売れる店、売れない店の秘密が分かってくるかもしれません。こういう調査は、大人になって、ビジネスマンになるとさんざんやることになると思いますが、いい練習になったことと思います。

　提案の「高知県が資金を出してブックオフから本を貧しい国に提供する」ですが、外国だともしかしたら言葉の壁があるかもしれませんね。ブックオフは売れない本をどうしているんでしょう。

生徒：　時々キャンペーンとかで全国に配ったりするらしいです。全部そういうわけではないと思いますが、あまりそこは詳しくは調べてないです。

知事：もし単に捨てているだけでしたら、何か公のことで使えるようにしてもらったらいいのかもしれません。どうやっているのかも大いに関係しているのかもしれませんね。

教育長：何店舗かで特徴があって、興味としてはどのお店が一番売上がいいのかをチェックできたら最高だと思いました。具体の提案があって、理想のブックオフの姿があって、私はずっと感心して聞いていました。連携方法で一工夫があったらもっと良かったと思います。それから処分する本ですが、どこかの県の図書館で、処分をする本で使えるもののバザーをやっていました。

●「アンパンマンで高知の活性化」（アイデア賞受賞）

知事：　おっしゃる通りだという感じです。西武跡地にアンパンマンミュージアム型複合施設は難しいかもしれません。民間の方の所有している土地なので、その方が自分の商売として成り立つものとして、今後やっていくことになろうと思います。できるだけ高知県に相応しいものにしてもらいたいと、今後も話をしていこうとは思っていますが、最後は民間の人の決めることになろうかと思います。はりまや橋周辺から高知城に至るまでの、昔から何百年も高知県の中心だった東西のラインで観光客も呼べるようなまちづくりをしていくことが重要だと思っています。観光客を呼ぶためには、いろいろな形で高知県の持っている強みを訴えていくものにしないといけません。

あと、確かに水木しげるロードは境港で大変ヒットしています。あれにならって、アンパンマンをもっと前面に打ち出した道とか、エリアを作ってみるのも一つの手なのかもしれません。高知県はマンガ王国で、人口１人当たりの漫画家の数は多分全国で図抜けて多いでしょう。高知県はそういうキャラクター創造力みたいなものがすごいですから、いろいろな漫画家のキャラクターを一堂に会するのも面白いかもしれません。とにかくこのマンガを生かして、中でもアンパンマンを生かして、その力で高知県を元気にする部分もぜひ作っていきたいと思っています。

先ほども話がありました、やなせたかしさんが作ってくださった「野菜 11 人きょうだい」のキャラクターは、子どもが引きつけられるらしいです。多分アンパンマンと同じ香りを感じるからでしょうね。やはりアンパンマンのパワーはすごいです。だからぜひ高知の活性化にいろいろな形で生かさせてもらいたいと思っています。アンパンマンロード、マンガロードは面白いかもしれません。いろいろな知恵がもらえて私たちも面白いです。体験型ジャムおじさんのパン工場も面白い。幼稚園の先生に聞いたとおっしゃっていましたが、小さいお子さんの気持ちの分かる人に聞いてみるのはいいことでしょうね。

高知県内の大学にアンパンマン学科を設置するのは、すぐその通りにはならないと思いますが、ただ、子どもたちの食育や地産地消、また商品開発や地域活性化に向けて、そういう学科ができる方向で県立大学の改革をしているところです。高知県の大学改革の関係で、今、大きな課題があります。それは、高知県には社会科学系の学部があまりないことです。例えば高知県には経済学部がないので、経済学部に進学をし

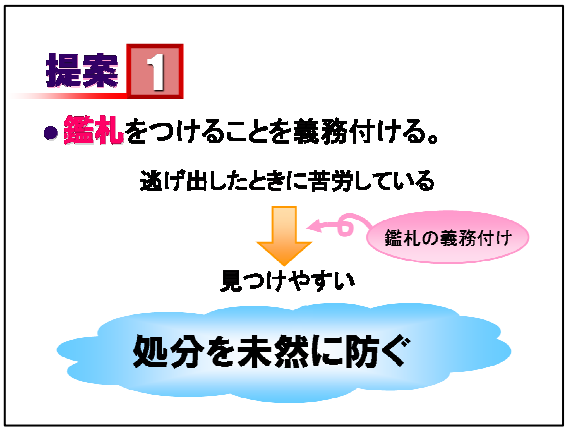
たいと思う方々が、みんな県外へ進学して、それきり帰って来なくなることがたくさんあります。高校生にアンケートを取ったら、もし県内にあるんだったら県内の大学に行って県内で残りたかったという子がかなりいたので、経営や経済の学問を高知の大学で学べるようにしていこうと一生懸命考えています。もう少し時間はかかりますが、来年春くらいには「高知県の県立大学はこのように変わります」というプランをお示ししていこうと思っています。

教育長：私はこの提案は大賛成です。楽しいですね。今、高知県で一番観光客が行っている施設がアンパンマンミュージアムではないですか。坂本龍馬の次に人を呼べるのはアンパンマンではないかと思っています。正義の味方で、弱い人には自分をちぎってアンパンを食べさせてあげる。こんなに夢のある話はない。可能性を追求していきたいと思わせるようないい提案でした。

知事：　アンパンマンがどのくらい昔からあるかを知っていますか。実感として言わせてもらうと、今 42 歳の私が幼稚園のときに見ていた本の最後の表紙でアンパンマンを４コマでやっていました。だから、38 年くらい前にもうありました。時代を超えてずっと子供たちに支持されていますから、やはり何か子供をつかむ魅力があるんでしょう。

●「動物愛護について　～わたしたちに出来ること～」（マネジメント大賞受賞）

知事：　高知県は人口当たりの殺処分数が一番多いところで、本当に不名誉なことだと思います。私も犬を１匹飼っていますが、今しつけ中です。子供ができたときに困ることもあるでしょう。（アンケートで、今までに捨て犬、捨て猫を見たことがあるが飼ったことはないと答えた）約５割の方は見て見ぬふりというか、飼うことまではできなかったということでしょうね。厳しい話ですが、きめ細かく調べておられてすばらしいと思いました。



提案の１で鑑札をつけ、逃げ出したときに見つけやすくしていく、買い手に誓約書を配付するのはすごく実効性がある話ですね。「１から 10 の約束」を読んだら、犬にも猫にも精神、気持ちがあると思えるでしょう。特に犬は目に表情があります。やはり自覚してもらうことが、まず第一歩だろうと思いました。提案の２、ドッグセラピーですが、私が昔東京で仕事をしていたときにこの話に関わったことがあります。これは、例えばラブラドールレトリバーなどでないとなかなかできなかったりするようですが、いろいろな形で子供の頃から動物と触れあえるような、動物の新しい活躍の場も重要でしょうね。「かわいそうだと思うだけではダメ!!!行動を起こしてください。どうやって・・・？できるだけ今の現状を多くの人に伝えることだ」とありますが、私も本当にそうだと思います。皆さんもこのことを多くの方に伝えていってください。

私も気をつけていきたいと思います。

　実際なぜ動物を手放すのかは、より深い理由があるかもしれません。いろいろな理由が背後にあると思います。高知県がワーストワンになるのは、特に多くの理由が重なっていて、経済的に厳しいということも大きな原因なのかもしれません。飼った限りは責任を持つ。繁殖のこともしっかり管理をして、のちに殺さざるを得なくなるようなことはしないことが大切でしょう。私は、誓約書の配布をできるだけみんなに訴えていくという提案は、本当に有益だと思います。

教育長：これは優しい動物愛護のテーマですが、非常に厳しいテーマですね。確か 10 年くらい前までこの譲渡会もなかったはずです。今から 10 年くらい前にある職員が譲渡会の提案をしました。私は県庁の財政課で予算を配分する仕事をしていましたので、「これは本当にひどい、少しでも命を救うために譲渡会をやったらいい」と予算をつけた記憶があります。私としては、それで少しは良くなったと思っていましたが、大きな課題を突きつけられて、非常に重たい気持ちになっています。

５　意見交換

生徒：　**小動物管理センターを見学させていただいたときに、職員の方から小動物管理センターは県が管理しているものではないと聞きました。例えば、熊本では、「犬を捨てたい」という電話が入ってきたときに、「もう１回考え直してみてください」と強く言えますが、高知市ではそういうことが言えないというような問題をいっぱい抱えています。例えば１回でもいいので知事が視察に行ったら、それだけですごく見る目が変わると思うので、現状を分かってもらうためにも知事に見学に来て欲しいとおっしゃっていました。お忙しいとは思いますが、ぜひ見学をお願いします。**

知事：　一回行ってみて、勉強してみます。

（小動物管理センターは高知市が中核市となったことに伴い、県と市で共同使用しており、管理・運営を民間委託しているものです。）

６　閉会

知事：　今日はいい発表を聞かせていただいて、ありがとうございました。皆さんがパワーポイントを使いこなして、簡潔明瞭に説明される姿を見て感心しました。それから、非常に面白いアイデアをいただいたり、また深刻な問題を深く考えたりして、本当に素晴らしいと思いました。自分で課題を設定して、それについて調べて、分析をして、そして解決策や前に向かっていく提案を作っていくという一連の勉強、こういうことを大人になったら毎日することになります。例えば私の県知事としての仕事も毎日こういうことを積み重ねていくわけです。今回、１年かけて皆さんが勉強されたことは、将来の本当に大きな財産になると思います。勉強されたことを今後も大切にされて、特に勉強した知識そのものより、どうやって課題を設定して、分析して、提案を考え

出したか、そのプロセスそのものをしっかり身に付けることをぜひ大切にしていただきたいと思います。

　南高校の皆さんが素晴らしい勉強をしておられることに、私も本当に嬉しくなりました。今後とも高知県を元気にするために共に知恵を出して頑張っていきましょう。どうもありがとうございました。

校長：　知事さん、それから教育長さん、このような場を設けていただきまして、ありがとうございました。生徒たちも本当に楽しみにしていた時間ですので、知事さんに思いを伝えることができたという手応えをつかんでいると思います。本日提案させてもらった中から一つでも二つでも、あるいは部分的にであっても実現できるものがあったら、生徒たちの励みになると思います。また私たちも提案やアイデアを発信させていただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。